

<http://outdoor.geocities.jp/tokinosunomori>

E-mail : tokinosunomori@yahoo.co.jp

<連絡先> 掛川市中宿 1 1 3 (TEL・FAX 0537-23-0412) 「森の駅 時ノ寿」(TEL 0537-28-0082)

<新春号もくじ>

ごあいさつ	2
時ノ寿窯のご案内	2
時ノ寿の炭のご案内	2
植樹祭のご案内	2

最近の活動報告 (時ノ寿ホームページ・ブログより)

時ノ寿 2010 年 10 大ニュース	3
2011 元旦・時ノ寿ノ森を歩く	4
杉花粉で地域興し	5
新しい公共とは	5
里山の手入れ	6
雪景色の中で	7
空師顔負けの枝打ち	7
初 窯	8
森を考える年	8
人は誰でも主役になれる	9
労働の喜び	10
厳寒の 1 月	10

2～3月クラブ活動予定	別紙
植樹祭会場案内図	別紙

時ノ寿の炭チラシ (利用方法)	別紙
時ノ寿の炭チラシ (商品紹介)	別紙

＜2011 年ごあいさつ＞

全国各地で記録的な大雪に見舞われていますが、クラブ員の皆様におかれましては、お変わりございませんでしょうか。

1月の寒さは、時ノ寿の森でもとりわけ厳しく、定例活動日16日には、時ノ寿の森では3cmも雪積があり、通行が危険なため急遽活動を中止させていただきました。

1月は、掛川市倉真地区の人々が主体となり、地域の放置スギ林からスギ花粉を採取して研究機関に提供する取り組みを行いました。嫌われ者のスギ花粉が里山活性の起爆剤になるかもしれないと、手探りで始めたプロジェクトでしたが、地域住民の知恵とパワーにより延べ10tを超すスギの枝を集めました。

当クラブのめざす「豊かな森を未来の子どもたちに引き継ぐ活動」は、長い時間とエネルギーが必要ですので、広く社会の人々が連携して自立・持続するシステムづくりが重要ですが、今年も大きな一歩を踏み出すことができました。

まだまだ厳しい寒さが続き、加えて杉花粉の例年以上の飛散も予想され、森林再生活動にとってはつらい季節ではありますが、お待たせのクラブ活動を開始いたします。皆様のご支援ご協力を心からお待ちしています。

時ノ寿窯をお楽しみください！

時ノ寿窯は、山村の魅力を芸術の分野からも高めようというのですが、陶芸家の徳川理事をはじめクラブ員たちの努力で年末完成しました。この窯のもう一つのねらいは、スギ・ヒノキ間伐材を薪燃料に利用して窯温度を陶芸に必要な1200度まで上げることですが、1月の試験焼きで成功しました。今後の時ノ寿窯の陶芸活動やスギ・ヒノキ間伐材の利用拡大にとっても期待が持てます。

まだ、本格的に窯を運用するには、これから何回かのテスト焼を行うなど試行錯誤していく必要があるようです。私たちの手によって明るく再生された時ノ寿の森で、時を忘れて陶芸に没頭できるなんて、素晴らしいですね。陶芸に興味のある方は、楽しみにお待ちください。

時ノ寿の炭をご利用ください！

クラブでは、森林から生産される「木」を使うことを勧めています。その一つとして、炭焼から出来る「木炭」を生活に利用することを奨励しています。「炭」には、優れた吸湿・消臭効果がありますので、燃料に利用するだけでなく、生活の身の回りに置けば、快適な住まいの環境が生まれます。クラブ員が、真黒になって作った「炭」を、ぜひお試しください。**同封のチラシをご覧ください、ご購入くださればうれしいです。地方発送いたしますが、送料はご負担願います。**

今年も植樹祭を開催します！

「第3回いのちの森づくり植樹祭」を開催します。詳細は、追ってご案内しますが、多くのクラブ員の皆様にご参加いただきたいので、日程のみお知らせします。

今年は、国際森林年です。未来の子どもたちのために木を植えてください。

日時 平成23年4月30日（土）午前10時開始

場所 掛川市倉真地内（倉真小学校近くの親水公園隣の森） **別紙参照**

<最近の活動報告> (時ノ寿ホームページ・ブログより)

2010 年 12 月 30 日(木)

時ノ寿 10 大ニュース

2010 年も、あと 1 日となりました。公私ともに 1 年を振り返りながら自信や勇気を高め、また反省もする「年の瀬」です。すべての人に、このような機会を与えてくれる慣習はいいものです。どんな人でも、1 年のうちには嬉しいことばかりというわけにはいきません。つらく、苦しく、悲しいことも避けては通れないのです。しかし、日は沈めば必ず昇るように、人生も同じだと思えます。だから私は、この時期が好きです。良いことも、悪いことも明日は 1 年を総決算し、来る年を迎えましょう。



時ノ寿の森クラブの 2010 年はどんな 1 年だったか振り返ってみました。月並みの 10 大ニュースを上げてみましたが、特に順位の優劣はありません。

- ①NPO 法人設立。法人登記 (4/6)。NPO 設立記念市民フォーラム開催 (4/25)。
12 月末現在入会者は運営会員 32 名・サポーター会員 106 名)
- ②いのちの森づくり講演会 (3/13)・植樹祭 (3/14) 開催。市内外から 400 名が参加して広葉樹 3000 本を時ノ寿の森に植樹。世界的植物生態学者・宮脇昭先生は掛川市へ 3 回目の来訪。
- ③法隆寺管長ほか「文化遺産を未来につなぐ森づくりの為に有識者会議」が呼び掛けている「私の山に『文化財の森』を・文化財創造プロジェクト登録リスト」に時ノ寿の森の「ケヤキ」が登録 (5/17)。
- ④民間企業から建設機械 (コンボ) 寄贈 (8/4)、日本財団助成による林内作業車・大型薪割機購入 (1/17) により森林再生活動機械化大きく進む。
- ⑤時ノ寿の森の魅力をアップさせる新たな施設が完成。「間伐材燃料の陶芸窯」(12/26)、「日本の里山モデル観察コース・いのちを育む道」(12/14)。
- ⑥森林再生活動の施設「作業小屋」(8/14)、「薪小屋」(9/19) が完成。
- ⑦4 種類の木炭商品が完成。毎日新聞東京本社ビル MOTTAINAI ステーションで試験販売開始 (11/5~2011 年 3 月末)。
- ⑧時ノ寿の森を楽しむ多彩なイベント開催。「森の音楽会」(8/21)、「COP10 記念・生物多様性自然観察会」(10/24)。
- ⑨時ノ寿の森産出木材の利用開始。K 邸建築材へ利用 (3 月)、東京都大

田区立障害者授産施設くすのき園へ寄贈（2/21）。浜松市の材木店へ杉丸太を出荷（11月）。

⑩内閣府「地域社会雇用創出事業・社会的企業人材創出インターンシップ事業」実施。
（10/2～12/26）

このほかにも、実施した活動はたくさんありますが、会員の皆様1年間本当にありがとうございました。このブログを読みながら、年末年始は2010年をゆっくり思い出していただければ幸いです。

写真は、宮脇昭先生・いのちの森づくり40年記念フォーラム（9/24）の際に、宮脇先生と菅原文太さんから激励を受け、いっしょに写真撮影させていただいたものです。

2011年1月2日(日)

元旦・時ノ寿の森を歩く

2011年元旦が輝かしく明けました。私事ですが、昨年中に父を亡くしましたので、社会通念上新年のごあいさつは遠慮させていただきました。そのような事情もありまして、元旦は兄弟そろって父名義の森林を踏査しました。

私の実家は、林業というほどの広い面積を所有している訳ではありませんが、小さな面積の森林があちらこちらに点在しているため、半日で回るつもりでしたが、ほぼ1日費やしてしまいました。

元旦早々から森林を歩き、あらためて森の荒廃ぶりを思い知らされました。そして、今日の木材市況の低迷を見れば、森林所有者の森林への関心はますます薄らいでいくばかりです。また、私の父が森林への思いをめぐらしながら、子や孫にしっかりとバトンを渡すことをしないで亡くなってしまったように、森林所有者が高齢で亡くなっていくケースは、ますます増加していきます。急に亡くなった所有者の相続人である子どもや孫たちは、森林の所在地や境界をほとんど承知していないのが現実だと思います。私たち兄弟は、子どもの頃から比較的農業や林業を手伝って来た方ですので、森林の所在地は承知していましたが、いざ山に行ってみると森林の境界は非常に分かりづらいということを実感しました。しかし、今となってはそれを教えてもらえる人はこの世には居ないという現実問題をあらためて痛感しました。

このような状況を考えますと、木材市況が低迷している今こそ、個人所有の民間林の維持管理体制をしっかりとする必要があると思います。今年も、荒廃する「ふるさとの森」を再生するために努力してまいりますので、ご支援をよろしくお願いいたします。

写真は、間伐が実施され、冬でも日差しが燦々と林内に差し込み、あたたかな生命を感じさせてくれる森の景色です。



2011年1月6日(木)

杉花粉で地域興し

今年の杉花粉の飛散量は、昨年の15倍とも20倍とも言われています。日本人の3人に1人はなんらかのアレルギー症をもっているようですが、スギ花粉がアレルゲンの人には、大変な春になりそうです。

日本各地の杉林は、国産材の低迷で伐採適期を迎えた森林も放置されたままです。そのような状況のため、かつて林業が栄えていたところに比べれば、スギ花粉を付けた杉の木の数量は何倍にも膨らんでいるので、花粉の飛散量も昔など比ではなく、大量であるに違いありません。



このように国内至る所に豊富にある物質ですので、これが中国のレアアースのように社会に活用される資源になったら、それは一大事です。夢物語と思われる人がほとんどでしょうが、その夢を現実にしようではないかとの呼びかけに、掛川市倉真地区の先輩男衆・女衆が集まってきて、今日から杉花粉採取プロジェクトの取り組みが始まりました。

厳しい冷え込みの早朝にもかかわらず、三々五々集まってくる男衆女衆は、たき火を囲んで井戸端談義をしながらメンバーの集合を待つのですが、地域の人々が目的を持って集まってくる姿は実に活気があっていいものです。

人口は減少時代に入り、生産人口はピーク時の4分の3にも減少しているといわれますが、地域には、昔とった杵柄でまだまだ活躍してもらえる先輩市民が大勢います。こうした市民が張り合いを持ち、地域の社会的事業に参加してくれる社会づくりこそ、政治や行政が知恵と工夫、さらには汗を出さなくてはならないと思います。

私たちは、手探りですが、自分たちの知恵と工夫とふるさとへの愛着により、杉花粉をキーワードに地域興しにチャレンジしてみます。

2011年1月13日(木)

新しい公共とは

世の中、次々に匿名寄付が現れていますが、これを機会に日本社会で薄れようとしている思いやりの心、地域のきずな、恩返し的心、小さな親切など昔流に言えば「浪花節」の文化を見直したいものです。

過去の恩義を忘れず、いつかその恩を返したいとじっと思い続け生きてきて、ようやく機が熟したときには、もはや恩義の相手は居なかったのです。ならば社会の他の人に親切を差し上げることで、恩返しをしようという人もいるでしょう。これならば、相手に対して自分の善意が直接伝わり、反応もすぐに確認でき、合理的な方法かもしれません。現代社会を見ると、税金や政治資金を支払ったり、提供した者の心を踏みにじるような悪行や愚行が後を絶ちません。だから、匿名の直接寄付が世の中に広がっているのかもしれない。



このような社会の中で、国や自治体は「新しい公共」と言って、市民力を活かす政策が活発化している。NPOや公益団体が地域の住民や企業を巻き込み、本当の地域の住民パワーや自然・資源によって地域固有の課題を解決していこうと呼び掛けています。すばらしいシステムですが、国や自治体は、国民が真摯に拠出した税金を、地域で活動するNPO等の団体に対して適切な配分をする制度を作る必要があると思います。

一方、新しい公共である「NPO」も、地域住民に直接関係する具体的な活動を行い、かつ実績を上げていかなければなりません。そして、その活動や信頼が社会に広がり、社会の善意の心がNPOに対して届くような社会になってほしいと願う今日この頃です。

昨年12月25日に初めて起きた「伊達直人」を名乗る匿名寄付は、実に多くの国民に多くの思いを致させ、さらに行動を起こさせたものです。写真は、地域の人々が地域の資源を社会に生かそうと、スギ花粉の採取に取り組んでいるところです。

2011年1月15日(土)

里山の手入れ

かつて里山は、地域の人々の生活（衣食住）と密接につながり、守られてきましたが、今では里山に暮らす人々の生活も、里山の資源がまったく利用されることのない生活様式に変化してしまいました。その結果、里山の小さな農地は耕作されなくなり、将来は家の用材にと植えられた杉や桧の木も手入れされることなく放置されています。それらの農地や森林は、人々の生活様式が変化してしまった現在では、もはや所有者の手で守られていくことは期待できません。



今回の杉花粉採取プロジェクトは、このような里山を持続的に守っていく手法としても、大いに期待できます。

寒波の続く中で、杉の木の伐採や花粉の付いた枝を採取する作業は、決して楽ではありませんが、地域の人々はいきいきと取り組んでくれています。ぜひ、このプロジェクトを成功させたいと思います。

2011年1月16日(日)

雪景色の中で

今朝、遠州地方に降った初雪が辺りを真っ白に変えていました。各地の大雪の被害を耳にしながら、この地域の温暖な気候をありがたく思っていました。厳しい冷え込みと雪による交通への影響など、雪国の人々のつらさを実感しました。

時ノ寿の森は、3cmを超える積雪で、林道の途中からは雪装備のタイヤでなければ通行ができません。きょうは、定例活動の日でしたが、急きょ中止の連絡を現場から発信しました。

4輪駆動の愛車「軽トラ」は、積雪の道をしっかり踏みしめて進んでくれるので、気をつけながら時ノ寿の森まで雪の様子を見に行ってきました。時ノ寿の森は、一面銀世界でした。



2011年1月17日(月)

空師顔負けの枝打ち

人里に空高く伸びた杉の木には花粉がいっぱい付いている。所有者にとって家の周囲や畑の傍らで空高く伸びた杉の木は、日当たりを悪くするので、枝打ちをしたいのだが、地上20mもの位置まで幹を登り枝を打つのは至難の業である。したがって、人里の杉の木は、何十年もの間枝打ちがされないで鬱蒼としている。



私たちのスギ花粉採取チームは、このような状態の杉の木の枝打ち作業をするのだが、地上20mもの高所作業は勇気と体力が要求される。以前TVで、都市などの邪魔になる大木を伐り倒す仕事人を「空師」と言うそうだが、現代社会のニーズを受け止め、社会に役立つ仕事として情熱を燃やす若い親方を取材した番組を見て、感動したことがある。最近の週末の自分の後ろ姿は、まさに「空師」である。

元来、高所は苦手な性格であるが、人間やらなければならないと思えば、何でもできるものである。枝を打ち終えて地上に降り、きれいになった杉の木を眺めながら、よくもあんなに高いところまで登ったものだ、自分をほめてやりたくなる。

まだ、これから同様な枝打ち作業は続くことになるので、くれぐれも事故を起こさないよう、慎重さと安全対策に気を引き締めた。

2011年1月19日(水)

初 窯

昨年未完成した時ノ寿窯は、しめ縄が飾られ、厳寒の森の中で静かに初窯の日を待っている。山村が活性化するためには、周囲から山村に人が集うことが絶対条件である。そして、人々の声が響き、炎や煙が立ち上ることが基本だ。この陶芸窯は、社会の人々を山村に導き、物づくりに熱中させる魅力が十分にある。陶芸に興味のある方は、明るく再生された時ノ寿の森で、時を忘れて陶芸に没頭してみしてほしい。



新規に築造した薪窯で本格的な作品を焼くためには、何回かのテスト焼で試行錯誤しなければならぬらしい。特にこの窯は、間伐材を薪燃料として利用するので、どの程度の薪を焚けば、どのくらい温度が上がるのかが、最大のポイントのようだ。

2011年1月22日(土)

森を考える年

「木が育つには年数がかかります。森は一度に切ってしまうはいけません。毎年育つ分だけ切っているのです。それを考えないで切ると、いずれ森が消えてしまいます。100年の木を切れば、すぐに植えても同じような木になるにはあと100年かかるのです。どうしたら森が維持できるのか、面倒くさがらずに考えてほしい」と、解剖学者・養老孟司さんは、今年の「国際森林年」にあたり、そうおっしゃっています。

今、日本の国土には、森林が豊富に蓄積されています。しかし、これらの木は、樹齢が40年から50年になりますが、この間の約40年間くらいはほとんど植林がされていません。さらに、今日のような木材市況低迷が続けば、木が切られることはありませんが、木を植えることも行われません。これはどういうことかと言え、養老さんのおっしゃるとおり、日本の今日の森林の状況は、次世代のために保全管理がされていないということです。



みなさん、国際森林年の今年は、ぜひ森林のことをしっかり考えていただきたいと思います。そして、自分の手で1本の木を植えてみてください。わが時ノ寿の森クラブは、国際森林年にちなみ来る4月30日（土）「第3回 いのちの森づくり植樹祭 in 倉真」を開催します。どうぞご参加ください。

2011年1月25日(火)

人は誰でも主役になれる

地域の自然環境や文化、そしてそこに住む人々の知恵やパワーは、地域を活性化させる大事な資源だ。それを証明して見せてくれたのが、徳島県上勝町のおばあちゃんたちである。70、80代のおばあちゃんたちは、地域で採れる「葉っぱ」を出荷し、1日に6万円も売り上げているおばあちゃんもいるという。この町では、地域の資源が、地域の高齢者の力により年商1億円を超える商品になっているのである。すばらしいことだと、昨年9月の講演を聞いて感動した。



今私たちも、地域の人々と花粉採取に取り組んでいるが、参加している地域住民のみなさんの平均年齢は、70歳を超えるかもしれない。しかし、寒い朝にもかかわらず、この取り組みにいきいきと快活に集まってきている。いい顔をした男衆、女衆で、実によく働き、明るい。この作業風景は、まさに上勝町の「葉っぱビジネス」のおばあちゃんたちの姿と重なって見える。

作業をしてきているおばあちゃんたちの中には、1週間のうち2～3日はグランドゴルフを楽しんでいるという方がいるが、この花粉採取を始めたら「こっちの方が楽し

いわ」と言って、グランドゴルフを休んで来てくれている。これこそ、高齢者の生き甲斐ではないだろうか。

人間いきいきと生きていくには、歳を幾つとっても、いい意味の欲は持っていなければだめだと言われるが、そのとおりである。そして、「人は誰でも主役になれる」と上勝町の人が言っていたが、それも可能なことであると、密かに思うこのごろである。

2011年1月30日(日)

労働の喜び

森林再生活動を持続して行くには、純粋なボランティア活動だけでは限界があると思っていたが、地域の人々がいきいきと参加してくれた杉花粉採取プロジェクトを振り返ると、森林再生活動を社会的事業として起業したい思いを強くした。

社会的事業とは、人々の善意な行動に支えられているのだが、その行動を長続きさせるために、人間の本能である「労働の喜び」、すなわち「行動への対価」を何か形で還元するシステムを構築することである。

初めての杉花粉採取は、何もかもが手探りであったが、森林再生活動を社会的事業に発展させる大きなヒントとなった。この事業が、来年以降もどのように展開するかは未定だが、森林を資源とした事業を創造してみたい。



2011年1月31日(月)

厳寒の1月

国内各地が記録的な大雪に見舞われている中、1月も今日は晦日である。積雪による被害は、住民生活に甚大な影響を与えている。また、経済状況も回復基調が見えてきたといわれるが、学生たちの就職率は超氷河期を脱する気配はまったくない。さらに、強毒性鳥インフルエンザが各地で発生したり、鹿児島県



や宮崎県では新燃岳が大噴火を起こすなど、国民生活は 2011 年も先行き不安だらけである。

このような厳しい状況を少しでも明るい気持ちにさせてくれるはずの政治は、どの政党が政権を担っても相変わらず「政治とカネの問題」で、通常国会も国民生活の為の本格的な論戦はまったく進みそうになく、右往左往している始末である。

そんな国会を横目で見ながら、都道府県や政令指定都市など大都市圏の首長たちは、地方自治制度のあり方について熱っぽい議論を展開している。また、地方の中小自治体においても、厳しい財政難の中での行政手法として「新しい公共」という呼称を多用し、NPO法人などに対して住民自治の新しい解決手法を呼び掛けている。

このような状況の中で 2011 年も 1 カ月が経過したが、わが時ノ寿の森クラブにとっては、地域住民参加による森林再生活動の持続可能な方向性について、手ごたえを感じた 1 月であった。